

「外科臨床と病理よりみた 小膵癌アトラス」

山口 幸二 著
田中 雅夫

京都大学名誉教授/大阪府済生会野江病院院長

今 村 正 之

膵癌は難治癌の代表格であり、しかも手術でしか根治を期待できなかった癌の1つである。外科医が多年にわたり、手術法の改良に努めてきたために、膵癌切除術は安全な手術になったが、切除後の生存曲線は芳しくない。化学療法として gemcitabine が登場して以来、膵癌に対して化学・放射線照射療法の有効であったとする報告が増えつつあるが、長期生存の向上に関してはさらなる新薬の開発が待たれるところである。現状では膵癌の長期生存者を増やすためには、早期診断で小膵癌を見つけて、早期に切除手術するのが本道である。いかにして小膵癌を見つけるか、これが膵癌臨床医の長年の課題である。

このたび九州大学臨床・腫瘍外科の田中雅夫教授と山口幸二助教授が出版された本アトラスには、様々な経過で見つけられた小膵癌患者の興味深い症例の記録が集積されている。

本アトラスは、膵癌の教科書としても要領よくまとめられており、膵癌診療の現状の知識のすべてが網羅されていると言える。個々の患者の

症例報告は診断契機と診断手順、画像所見、手術法が記載され、切除標本と組織診断がきれいな写真とスケッチでわかりやすく提示されている。これだけ多くの小膵癌を予後とともに提示されたのは、同じ九州の福岡大学池田靖洋教授のアトラス『膵管像からみた膵疾患の臨床と病理』(1991年刊, 2003年絶版, 医学書院)以来のことであろう。

田中雅夫教授らは IPMT 患者において膵臓の IPMT と関係のない部位に小膵癌が発生したことを報告して、国際的にセンセーションを巻き起こしたことで有名である。本書の中でも、それらの症例集積と発癌機序の考察も行い、臨床的注意点にも触れている。IPMT と膵管癌の発癌過程が異なるものか、共通性を持つのか、興味深いところである。将来、IPMT を有する膵臓の症例中には、膵全摘をすることにより膵癌を免れて長期生存しうる患者がいることが示唆されている。膵全摘は、インスリンのコントロールさえすれば、十分寿命を全うできる術式である。適応例はいると考えられる。

膵臓は膵管細胞から分化して膵の

様々な細胞ができてくるが、膵癌はどの段階の細胞と類似性があり、どのような細胞と遺伝子を共有しているのかを評者らは研究している。そして、多くの膵癌は領域発生のように見えるが、どのような遺伝子異常が領域的に起こるのか、領域発生の範囲はどのような条件を満たす領域なのかなどについても興味を持っている。

本書に収められた様々な患者の記録が、読者にこれからの膵癌研究のテーマを提供していくことを考えると、本書の意義は非常に高いと言える。現在活躍中の膵臓外科と膵臓内科の医師には、座右の書として置いてほしいし、医局の図書室で若い研修医達に気楽に繙いてほしいアトラスでもある。

長年の九州大学外科教室膵臓グループの努力に敬意を表し、本書の刊行を心からお慶び申し上げますとともに、本書が多くの読者を持つことを願っている。

● A4 頁 184 2005 定価 15,750 円
(本体 15,000 円 + 税 5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)